

レイプ言説のパラダイムシフト ～米国誌『Ms.』を中心として～（2013）

A Paradigm Shift of Rape Theory

A Role of the Ms. Magazine for Women's Issues in the 1980s (2013)

栗木 千恵子
Chieko KURIK

中部大学 人文学部 Chubu University, Faculty of Humanities

要旨・・・レイプは長らく女性の落ち度とされ、存在しない問題とされてきた。しかしベティ・フリーダンの提起した「名前のない問題」に触発された女性たちは、リブ運動の高まりとともに自らの体験を語り始め、レイプを告発されるべき犯罪へと社会の認識を変容させていった。この問題に大きな役割を果たしたのは『Ms.』であった。同誌はまた初の全米規模のレイプについての実態調査を敢行し、それまでのレイプ神話を覆した。勇気を出して語り始めた女性たちと『Ms.』がこの一連の変容に大きく貢献したのである。

キーワード ウーマンリブ、デート・レイプ、フェミニスト・メディア、『Ms.』、レイプ言説

はじめに

ベティ・フリーダンは著書『女らしさの神話 (Feminine Mystique) 』で「名前のない問題」が高学歴で郊外の住宅地に住む中産階級の家系の主婦たちに共通の問題であることを解明し、ウーマンリブに大きな影響を与えた。フリーダンの「発見」に触発された女性たちはアメリカ社会にその改革を求めて「個人的なことは政治的なこと (Personal is Political) 」を合言葉に活動を開始し、やがて全米を巻き込む性による差別の撤廃を求めた運動へと発展していったのである。本稿ではレイプ犯罪に対して改革を求めた女性たちと女性の視点を重視するフェミニスト・メディアの役割を、女性たちの「声」を集集し、リブの象徴でもあった『Ms.』の記事を中心に検討し、その社会的意義を考察する。

1. 女同士の絆

1972年に創刊されたアメリカ合衆国初の本格的フェミニズム月刊誌『Ms.』は鮮烈なデビューと妊娠中絶合法化の衝撃的なキャンペーンで知られているが、同誌が果たした役割は、女性たちが昔から人知れず苦しんできた「隠された問題」に光を当て、実態を調査し、社会の認識を喚起し、女性たちに「自分の人生を取り戻す」契機を与えたことと見ることが出来る。雑誌の読者の間には趣味や興味、ライフスタイルなどに共通点が見られることが多いが、読者間と編集部との連帯は『Ms.』の場合はことに強く「絆」と表現してもよいほどであった。読者の投稿は驚くほど率直で、その頃はまだ公に語られることが稀であったセクシュアリティについても綴られている。記事を読んだ読者が自分の考えを編集部に送り『Ms.』はあたかも現在のネット上のポータルサイトであり、当時の読者間のフォーラム（広場）となった。女性たちは自らの体験を本音で語りあうことで共通の問題や社会のからくりなどを共有し「個人的なことは政治的なこと」の実践を目指すウーマンリブを、地に足のついた草の根の運動として広めてゆく効果があったといえる。『Ms.』が積極的に掘り起こしたライフストーリーもまた女性たち個々の日常生活や体験および母親や祖母たちの人生であり、個人史・自分史でもあった。こうしたライフストーリーの集積がレイプ言説のパラダイムシフトに大きな役割を果たしたと考えられる。『Ms.』の発行部数はピーク時には約50万部に達したが (Thom 1997:160)、郵送による定期購読者が多数を占めた人口密度の低い州以外では回し読みする共有読者も多く、実質的な読者は同じ時期に全米でおおよそ300万人であったといわれる (ibid.1997:front flap)。

2. レイプについて

(1) 先行研究

1975年に出版されたスーザン・ブラウンミラー (Susan Brownmiller) 著『レイプ・踏みこじられた意思(原題: Rape Against Our

Will Men, Women, and Rape)』はフェミニズムの原典とされ、現在でも評価の高いレイプに関する初の本格的告発の書である。ブラウンミラーはレイプについて「強姦(翻訳文のまま)とは、すべての男がすべての女を恐怖状態にとどめておくことによって成立する、意識的な威嚇のプロセスにはかならない」と書いている(ibid. 1975=2000:6)。またレイプの真の原因は、権力と暴力と密接に結びついた(ibid. 1975=2000:172)。「レイプ・イデオロギーである(ibid. 1975=2000:2)」ととらえた。その背景には、「社会のあらゆるレベルに浸透している文化的価値によってその勢いを得ている価値観があり、正面攻撃をもって撃退すべきなのは、まさにこの価値観である」と主張している(ibid. 1975=2000:316)。ブラウンミラーの考察は、刊行当初から賛否両論を引き起こした。過激すぎるという反発(現在でもこうした批判は皆無ではない)と勇氣ある告発の書という対照的な評価であるが、現在ではこの分野の古典としておおむね高く評価されている。特筆すべきはレイプ被害者の証言を収録した点である(ibid. 1975=2000:375)。フェミニズムの女性たちは1971年にレイプを初めて女性の問題として取り上げたという(ibid. 1975=2000:318, 341)。同じ頃、ブラウンミラーたちは世間の冷笑のなか、レイプについて語る集会やワークショップ、討論会などの開催をニューヨークで開始した(ibid. 1975=2000:327)。そして2年とたたないうちに運動は地域レベルへ、さらに全米各地へと広がっていった(ibid. 1975=2000:328)。レイプ被害者のライフストーリーに象徴される勇氣ある女性たちの証言が事態を改善させる推進力となったのである。しかし全米規模の運動には至らなかった。

(2) ニューベッドフォードのギャング・レイプ事件

潮の流れが変化する契機となったのは1983年にマサチューセッツ州ニューベッドフォードで勃発し、のちにジョディ・フォスター主演で映画化された『告発の行方(原題: The Accused)』(1988年製作)のモデルとなったギャング・レイプ事件である。21歳の女性が、ビッグ・ダン(居酒屋の名前)のプールテーブル(玉突き台)の上で複数の男性にレイプされ、店にいた男性客ははやし立て、警察へ通報することはなかったのである。この事件は全米のトップニュースとなり、事件の公判は地元のケーブルテレビで放映された。起訴され有罪判決を受け、服役したのは4名である。以下『Ms.』の1983年7月号の記事を中心に考察する。

(3) 『Ms.』の報道

この記事は事件からおおよそ4ヵ月後に掲載され『Ms.』のこの事件に対する結論ともいうべき位置づけにあるが『Ms.』に記事を寄稿したメアリー・ケイ・ブレイクリー(Mary Kay Blakely)は、この事件の特筆すべき点として、店は犯行の最中も通常通り客に飲み物を出し営業を続け警察に通報もせず、店にいた男性客の誰ひとりとして通報もせずレイプを見物したことであると指摘し、はやし立てた男性ばかりでなく、レイプを黙認した周囲にいた男性たちも同罪であると主張した。しかしハーバード大学の法律学の教授は「態度」だけでは法的にはグレイゾーンであり、有罪にできないとテレビの人気トーク番組で解説している。

『Ms.』の視点は被害者を含め男性を焦点に「レイプ神話」およびなぜレイプはなくならないのかを中心に鋭く分析している。その理由の一つは、男性と女性の受け止め方の相違がさまざまな誤解を生んできたとし、女性のノーはノーではないという認識は最たるものであるとした。『Ms.』はきっぱりとこの神話を否定し、レイプはレイプであるとする。さらにソフトなレイプはありえないと、夫婦間のレイプを「ソフト・レイプ」と表現することに異議を唱えた。夫婦間にレイプは存在しないという意見が圧倒的であったなか、批判を覚悟で踏み込んだ『Ms.』の主張はさらに、女性が酔っていても、灰めかすような態度を取ったとしても、誘惑しているように見えても、女性の意思に反すればレイプであるという、控え目に考えても当時の通念とはかなりかけ離れたものである。しかしレイプは性的な行為ではなく、暴力そのものであるという考えを『Ms.』は当初から鮮明に打ち出していて「女性の落ち度」を否定した主張は、この観点の延長線上にあるものといえよう。いずれにしても『Ms.』の論調は、非はレイプした男性の側にあるという一貫した点で際立っていた。

女性の落ち度を重視する社会の風潮は一朝一夕には変わらないであろうという懸念を表明しながらも『Ms.』の見解はレイプの予防や減少は可能であるとし、そのためにも男性の理解と協力が必要である。この記事をぜひ親しい男性に見せて考えてもらってほしいと読者に呼びかけている。

(4) 事件の影響

実行犯が有罪となったこの事件の影響は無視できないものであった。判決の意義は女性が誘惑的な態度を取っても、以前親密な関係であっても女性の意思が変われば、その時点で女性の意思は尊重されなければならないというものであり、女性のノーはノーではないとする言説に真っ向から異議を唱えるものであり『Ms.』の主張がほぼ全面的に認められたと考えられる。この事件の後、3件のレイプ裁判でいずれも男性側が有罪とされたが、以前では考えられないことであった。しかしニューベッドフォードの原告は地元住民の強い反発から転居を余儀なくされ、レイプ裁判の過熱するメディア報道に恐れをなして、地元で

はレイプの届け出件数が激減したという。レイプ・クライシス・センターの職員は、レイプされた女性は、最初はレイプ、次に裁判でのメディアレイプ、そして最後に実名が報道されたため地域住民の反感を買ったことを挙げ、三度レイプされたようなものだと、怒りを露わに1984年の現地での筆者のインタビューでメディアのレイプ報道に強い懸念を表明した。

次に『Ms.』が実施した全米規模の初のレイプに関する実態調査の結果とその意義をデート・レイプを中心に考察する。

3. 『Ms.』のレイプの実態調査

(1) 調査について

米国で当時関係者の中で『Ms.』プロジェクトと呼ばれた全米初の本格的な大学生を対象としたレイプに関する大規模な実態調査の主要な目的は(1)女子大生に対するレイプと性的攻撃 (sexual assault) の発生件数と被害者数 (2)レイプ(性的暴行)の実態 (3)女子大生に性的暴行を加えた男性について(4)被害者である女子大生について(5)被害者の心理的な影響について調査するというものである (Warshaw 1988:191)。

(2) 調査結果

『Ms.』の調査結果から以下の事実が判明した。(1)25 パーセントの女子大生がレイプ、もしくはレイプ未遂を体験している。(2)うち 84 パーセントが知人によるものであった。(3)警察へ被害を届け出たものは5パーセントに過ぎない。(4)レイプされた女子大生のうち、27パーセントしか自分はレイプの被害者であると認識していなかった (ibid. 1988 : back cover)。(5)意思に反して強要された性行為という法的な定義によるレイプを行った男子学生の 84 パーセントは自分がした行為は断じてレイプではなかったと答えている (ibid. 1988 : 90)。(6)レイプした男子学生とレイプされた女子学生の平均年齢はいずれも 18・5 歳であった (ibid. 1988 : 39)。レイプおよびレイプ未遂件数のうち、84 パーセントがデート相手、男性の友人、クラスメート、アルバイト先の上司、近所の男性など知り合いによるものであったという驚くべき結果を踏まえて『Ms.』はデート・レイプということばを知人によるレイプ (acquaintance rape) という表現に修正した (ibid. 1988 : 164)。

(3) 十代のデート・レイプについて

『Ms.』の調査では 38 パーセントの被害者は 14 歳から 17 歳であったという (ibid. 1988 : 117)。しかし中学生や高校生なども被害に遭っていた (ibid. 1988 : 115)。しかし被害に遭った場合もレイプと認識することは稀であるという (ibid. 1988 : 119-120)。べつの調査 (註 1) によると、被害に遭った少女たちの 78 パーセントは両親には隠しているものの、71 パーセントが同年代の一人および複数の友人に打ち明けているという。しかし警察へ届け出た者は 6 パーセントに過ぎない。その理由は相手が見知らぬ者ではなく、身体に残る外傷などがないため立証が難しいと考えるためとしている (ibid. 1988 : 119)。十代の少女たちもそれ以上の年代の女性たち同様に、レイプは見知らぬ男性によって引き起こされるというレイプ神話を信じていることが見て取れる。

『Ms.』の調査結果が刊行された 1988 年にカリフォルニア大学ロサンゼルス校の研究チームが行った 14 歳から 18 歳の 432 名を対象としたアンケート調査によると(1)相手の女性に性的に興奮させられた場合、少年の 51 パーセントが性行為を強要してもかまわないと回答している。同じ質問に 42 パーセントの少女もかまわないと答えている。このアンケート調査ではレイプということばは使用していないが、調査者は、これはレイプに他ならないと指摘している。(2)またセックスに同意した後女性の考えが変わった場合、54 パーセントの少年はセックスを強要してもかまわないとし、31 パーセントの少女もそれに同意している。セックスの強要はレイプであるにも関わらず、他の調査においても同様の結果が報告されているという (ibid. 1988 : 120-121)。十代の性的行動には社会規範の影響が大きい、同様に飲酒もレイプの大きな引き金となることがべつの調査で指摘されている。この調査によれば初めて本格的に飲酒をした平均年齢は男女ともに 12 歳で、14 歳から 17 歳の少年少女の 330 万人が飲酒に問題があるという。知人によるレイプは飲酒後に多く発生するため飲酒習慣も問題であると指摘されている (ibid. 1988 : 121)。十代に限らずアルコールやドラッグはレイプを引き起こしやすい要因となっているからである (ibid. 1988 : 44)。

以上の結果から男性のみならず女性自身もデートを始める年代である十代から大学生までが、レイプ神話の信奉者であるといえることになる。ブラウンミラーの著書が刊行されて 10 年後に『Ms.』の調査結果がまとまったが、レイプ・イデオロギーやレイプ神話はいぜんとして若い世代へ伝承されていることが見て取れる。

4. 「語り」の力

レイプされた女性が米国主要メディアで初めて実名で取材に応じ、1年かけて彼女を取材した『デモイン・レジスター』紙に 1990 年に掲載された 5 回の連載記事は全米のトップニュースとなり、彼女の勇気を称える共感の手紙が新聞社に殺到した。

手紙の多くはレイプ被害者からのものであった。編集主幹および記事を書いた記者は女性であり、同記者は女性同士だからこそこの連載が実現したと筆者の現地取材に答えている。同紙は翌年ピューリッツァー賞を受賞した。米国のほぼすべての主要紙がこの記事について書き、同じように苦しんでいる女性たちの役に立つならこの女性はほぼすべての主要テレビ番組に出演し自身の体験とレイプの影響について発言した。当事者本人による「語り」の力は大きく、語りがたきを語った勇気がその後の改革に影響を与えた。

おわりに

レイプに関してレイプ・イデオロギーやレイプ神話の根絶は依然として道半ばではあるものの、女性たちや性的暴力に関心のある市民の活動により、大学へのレイプ教育プログラムの導入、レイプ・クライシス・センター、カウンセリングなどレイプ被害者へのサポートシステムの拡充、ニューベッドフォード以降のレイプ裁判の判決、レイプ被害者のレイプ以前の性体験などを証拠として採用すること（筆者注：裁判で聞くこと。被告には聞かないのに不当という声への対応である）を禁じるレイプ・シールド法の成立が1970年代半ばから80年代半ばにかけて広がっていったことなど、成果は上がってきている。現在では夫婦間のレイプをソフト・レイプとは表現せず、婚姻レイプ、夫婦間の暴力的セックスと表現するのが一般的である（Brownmiller, op. cit., 1973=2000: 373-374）。そして現在では、この婚姻レイプを全米すべての州が有罪としている。1976年以前は、全米すべての州が婚姻間レイプを犯罪とは認めなかった事実を考えると大きな変化である。さらに実態をより正確に伝えるためにレイプを性的暴行と言い換える動きも増えている。今回検討したことからレイプ言説の変容には『Ms.』と女性たちの活動、そして実名で発言した女性の影響などが大きな推進力となったといえる。『Ms.』は女性たちのライフストーリーから問題の所在を解明し、女性たちの「声」を結集して、社会に問題提起し、実態調査により「名前のない問題」に名前を与え、従来の「レイプ神話」を覆した。その功績は大きいと考える。

補注

註1 Suzanne S. Ageton による Behavioral Research Institute in Boulder, Colorado の調査による。

現地取材 ニューベッドフォード 1984年3月、『デモイン・レジスター』紙本社 1994年3月

参考文献

Benke, Timothy, 1982, *Men on Rape*, St. Martin's Press.

Benckais, Nijole V. and Feagin, Joe R., 1986, *Modern Sexism: Blatant, Subtle, and Covert Discrimination*, Prentice-Hall Inc. (=1990, 千葉モト子訳『セクシャルハラスメントの社会学』 律文化社)

Brownmiller, Susan, 1975, *Against Our Will: Men, Women, and Rape*, Ballantine Books. (=2007, 幾島幸子訳『レイプ・踏みこじられた意思』 勁草書房).

Denny, Todd, 2007, *Unexpected Allies: Men Who Stop Rape*, Trafford Publishing.

Ungar Donovan, Josephine (1985) *Feminist Theory: The Intellectual Tradition of American Feminism*, Fredrick Publishing Co., Inc. (=1987, 小池和子訳『フェミニストの理論』 勁草書房).

Forbat, John D., 2011, *The Men's and Women's Programs Ending Rape through Peer Education*, Routledge.

Freidan, Betty, 1963, *The Feminine Mystique*, WW Norton & Co. Inc. (= 1977, 三浦富美子訳『新しい女性の創造』 大和書房).

Thom, Mary, 1997, *Inside Ms.: 25 Years of the Magazine and the Feminist Movement*, Henry Holt and Company, Inc.

Thom, Mary, ed., 1987, *Letters to Ms.: 1972-1987*, Henry Holt and Company, Inc.

Thompson, Paul, 1978, *The Voice of the Past*, Oxford University Press. (=2002, 酒井順子訳『記憶から歴史へ オーラル・ヒストリーの世界』 青木書店.)